連載・雑草のよもやま《第3回》

「図説　熱帯植物集成」渡辺清彦先生の生物学講義テキスト

公益財団法人
日本植物調節剤研究協会
技術顧問
森田　弘彦

熱帯の雑草や植物についての情報がカラー写真を満載した書物やインターネットで容易に入手できる時代になったが，主に東南アジアに産する2,200余種の植物の線画と水彩の植物画を収録して1969年に刊行された「図説　熱帯植物集成」は，今でも熱帯の雑草や植物を調べる際の優れた情報源である（図-1）。本書は，イギリスの著名な植物学および菌類学者Edred John Henry Corner博士（1906～1996）と渡辺清彦先生（1900～2000）の共著で，各植物の英文解説をCorner先生，和文と線画・水彩画を渡辺先生が担当されたので，実質は渡辺先生が主著者である。渡辺先生は，本書執筆の経緯について「序言」で以下のように記された。

「本書の著者の一人渡辺は,Penang植物園長として1942～1945年の間，Malaysia，Singaporeに滞在中，Burma，Thailand，Sumatra，Andaman，Nicobar地方にも調査のためたびたび出張，その間，日常の公務のほかに毎日時を惜しんで，生の植物から一つ一つ写生図を描き続けた．その意図は，植物を理解するのには写生図に及ぶものはないとの著者平常の信念に基づくものであった．そして約3か年にわたる努力の結果，画き上げた植物は2,200余の多数に及んだ．（中略）この図は当時の事情からついに公刊されず長く，Singapore植物園の書庫の一部に死蔵されていたが筆者は，いつの日かこれが世に出てお役に立つことを待ち望んでいた．」

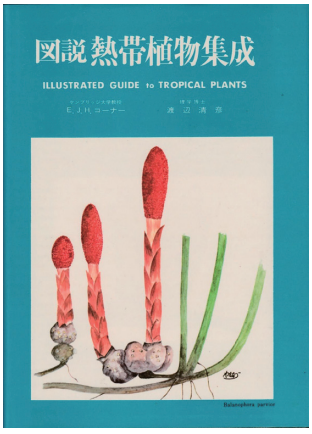

図-1　「Corner・渡辺著、図説熱帯植物集成（1969）」の表紙カバー

太平洋戦争のさ中に植物学者として戦線に派遣され，膨大な植物資料を収集・作成した渡辺先生は，「この図は公刊されず‥」と述べたが，「南方圏有用植物圖説」として,「薬用植物」が1944年8月に馬來軍政監部から，「第貳編食用植物」が終戦直前の1945年5月に昭南植物園から刊行された。「昭南」は太平洋戦争中日本の占領下でのシンガポールのことである。後者は「編輯責任者　渡邊清彦」で文庫版より少し大きく，700ページの図説からなるもので，インターネットには，同書から「わたなべ」のサイン入りの「ムクゲタチゴセウ *Piper stylosum*」と「オニタチゴセウ *Piper umbellatum*」の図説2ページ分が示された記事がある（htt://blogs.yahoo.co.jp/heystaque/51952806.html ）。この2枚の線図は「図節　熱帯植物集成」の155ページの図説と同じものである。つまり，渡辺先生の図は一度出版されたことになる。

Corner先生について「序言」では，「親友」,「CORNER教授は熱帯植物学の世界的な権威者であり，特にMalay, Indonesiaの植物学への貢献はあまりにも有名で‥」と書かれていて，先生の英文序文には「The illustrations in this work were made by the Japanese author during his time in Singapore and Malaya, 1942-1945. The names have been checked, so far as current revisions allow, and the brief descriptive notes added by the English author.」とある。本書におけるお二人の分担関係のみが書かれ，植物学上の個人的な関係には触れられていないが，「current revisions（現時点の改訂）」とあるのでCorner先生は「南方圏有用植物圖説」を踏まえておられたかもしれない。イギリスの統治下にあったシンガポールに日本軍が侵攻して占領した時，ラッフルズ博物館の副園長であったCorner先生は，ここから日本の敗戦まで捕虜として過ごした期間の，日本の科学者や軍関係者との交流記録を「思い出の昭南博物館　占領下シンガポールと徳川候（石井美樹子訳，中公新書）」として1982年に出版した。ここには渡辺先生も登場するが，熱帯の植物をめぐる具体的な交流には触れられていない。Corner先生も熱帯植物の線画を描かれたので，この点は別稿で紹介したい。

筆者は，1986年から2年余り，イネ栽培技術の共同研究でスリランカに派遣された折に「図説　熱帯植物集成」を持参して，現地の植物や雑草を知るために頻繁にひもといた。大部で重いこともあって，帰国時にコロンボ市内にあったスリランカ日本人会の図書室に寄贈してきた。現在手元にあるものは2代目である。

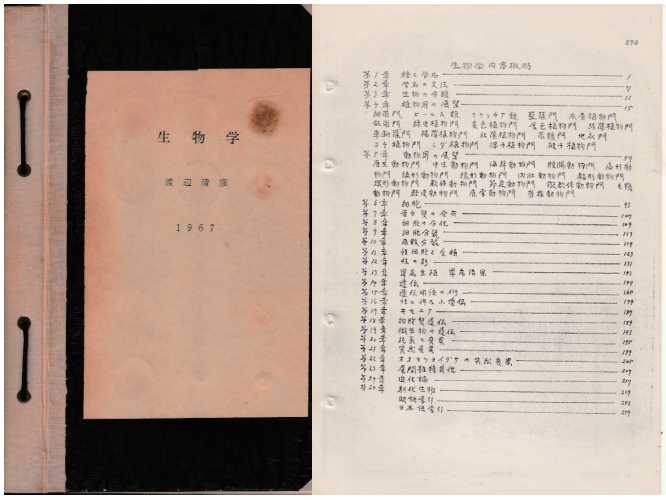

図 -2　渡辺清彦先生の「生物学講義テキスト　1967 年版」、表紙（左）と第 1 ～ 25 章の概要（右）

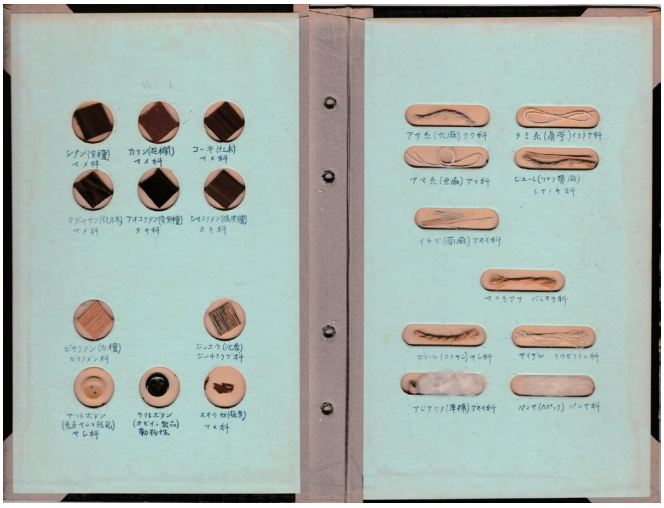

図 -3　「生物学講義テキスト」の表紙裏に埋め込まれた南洋材や香木などのサンプル（左）と裏表紙裏の植物繊維サンプル（右）

さて，渡辺先生はシンガポールから帰国後，1949 年から静岡農林専門学校と静岡大学の教授を経て 1950 年から千葉大学教授，1966 年から和洋女子大学の教授を務められた。千葉大学と和洋女子大学では一般教育の生物学の講義を担当し，得意のスケッチや実物を多用した講義用テキストを作成して，これを毎年改訂した。ここに紹介するのは 1967 年の改訂 15 版，「第 1 章　種と学名」から「第 25 章　馴化生物」までと欧語・日本語索引から成る B5 判 270 ページの，手書きの原稿を印刷した教科書である（図 -2）。この手作りの教科書には，履修する学生の関心を高めるための工夫が随所にあふれている。表紙裏には 6 種の木材・3 種の香木・2 種のボタン，裏表紙裏には 10 種の植物繊維の実物見本が，厚い綴込表紙を切り抜いて埋め込まれている（図 -3）し，テキストの中にも各種の貝殻から作られたボタン，織物，染料などの実物見本が張り込まれている。文章中にも，豆知識や生物学者のエピソードなどが盛り込まれていて，例えば，ラテン語で表記される生物の学名の部分には以下の挿話がある。

「○ラテン語の読み方　ローマ人が何のように発音したかはわからないから英国人は英語流に，ドイツ人はドイツ流に発音する．日本人はローマ字讀と英語讀を混合して発音する人も少なくない．cはク，シ，chもク，z，i，yはイ，usはウス，umはウム．但しaeはアエと発音してもよいが，英語流にエーと云ふ人が多い．Rosaceae ロザケー，ロザシー　Palmae パルメー」

実際，*Echinochloa*（イヌビエ属）を筆者は「エキノクロア」と発音するが，海外の方は「エカイノクロア」といい，*Oryza*（イネ属）は日本では「オリザ」，海外では普通「オライザ」と発音される。どちらが正しいということはないが，しばしば妥協しつつも，胸の中では「世界は英語圏のみではない」と抗っている。

生物学の講義に込めた渡辺先生の思いは，あとがきの部分にある。

図 -4　「図説 熱帯植物集成」から「生物学講義テキスト」に使われた、マライヤマバショウ（*Musa malaccensis*）の植物画

「・・・元来一般生物学者と云ふものはなく日本では生物学の各専門分野の人が一般教育の生物学を分担するので一般生物学の講義の構成には種々の角度からのものがあって定った型はない．然し有機体としての生物界の認識と把握が目的であるからここでは生物の遺伝に主力をおいた．（中略）又一般に観念的になり過ぎるのを防ぐため日常生活に関係ある生物資源のサンプルを示すことに努めた．・・」

テキスト中の多数の挿画には，意外にも「図説　熱帯植物集成」所収のものは使われておらず，最後の「馴化生物」での栽培バナナと対比した野生バナナ（図 -4）の 1 枚のみであった。これほど工夫をこらして準備されたテキストで多数の学生が学んだのであろうが，学生はその時点でなく，後になってその良さを理解したに違いない。